

『文選集注』江淹「雜体詩」 訳注

潘黄門（述哀） 岳

花岡 亜希

- 01 青春速天機 青春 天機を速やかにし
- 02 素秋馳白日 素秋 白日を馳す
- 03 美人帰重泉 美人は重泉に帰し
- 04 悽愴無終畢 悽愴として終畢無し
- 05 殞宮已肅清 殞宮は已に肅清として
- 06 松栢転蕭瑟 松栢は転た蕭瑟たり
- 07 俯仰未能弭 俯仰するも未だ能く弭れず
- 08 尋念非但一 尋念すること但だ一たびなるのみに非ず
- 09 撫衿悼寂漠 衿を撫して寂漠たるを悼み
- 10 怳然若有失 怳然として失う有るがごとし
- 11 明月入綺窓 明月 綺窓に入り
- 12 髣髴想蕙質 髣髴として蕙質を想う
- 13 消憂非萱草 憂いを消すは萱草に非ず
- 14 永懷寄夢寐 懷いを永えにして夢寐に寄す
- 15 夢寐復冥冥 夢寐は復た冥冥として
- 16 何由觀爾形 何に由りてか爾の形に觀わん
- 17 我慙北海術 我は北海の術に慙じ
- 18 爾無帝女靈 爾は帝女の靈無し

- 19 駕言出遠山 駕して言に遠山に出で
- 20 徘徊泣松銘 徘徊して松銘に泣く
- 21 雨絶無還雲 雨絶えて還る雲無く
- 22 華落豈留英 華落ちて豈に英を留めんや
- 23 日月方代序 日月 方に代わりて序で
- 24 寢興何時平 寢興 何れの時にか平らかならん

〔押韻〕

○畢・一・失・質（入声第五質）、瑟（入声第七櫛）、寐（去声第六至）。

○形・靈・銘（下平第十五青）、英・平（下平第十二庚）。

〔校勘〕

述哀 「悼亡」（尤刻本・胡刻本・国子監本）

09 撫衿悼寂漠 「撫襟悼寂寞」（尤刻本・胡刻本・国子監本）

本・建州本） 「撫衿悼寂寞」（陳八郎本・明州本・秀州本）

13 消憂非萱草 「銷憂非萱草」（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

14 永懷寄夢寐 「永懷寧夢寐」（尤刻本・胡刻本・国子監本）。明州本・秀州本はこの句下に「善本作寧字（善の本は寧の字に作る）」、建州本は「善作寧（善は寧に作る）」と注す。

22 華落豈留英 「花」落豈留英」へ陳八郎本・明州本・秀州本・建州本

は、順序どおりにかわるがわる現れて時が流れて行くが、寝ても覚めても心穏やかになるときは一体いつになったら訪れるのだろうか。

【潘黃門（述哀）岳】

劉良^①曰、謂悼婦詩也。

劉良曰く、婦を悼むを謂う詩なり、と。

【校勘】

謂悼婦詩也 「謂悼婦詩」（「也」を欠く）へ陳八郎本・明州本・秀州本・建州本

【訳】

劉良は言う。婦人の死を悼む気持ちをうたった詩である、と。

【注】

① 劉良曰 詩全体の内容を概説する注。

01 02 【青春速天機 素秋馳白日】

李善曰、楚辞曰、青春受謝。

潘岳悼亡詩曰、曜靈運天機、四節代遷逝。

【訳】

春は天の運行を速め、秋は飛ぶように日々を駆け去らせていく。美しいあの人は深い黄泉の下へと帰ってゆき、悲しみが消えることはない。棺を安置してあつた御殿はもうひっそりとして、墓地の松や柏もいよいよ物寂しさを増していく。わずかな挙措の間も忘れることなどできたためしがなく、求め想うのは一度や二度のことではない。衿を取って物寂しさに心を痛め、ぼんやりとして何かを失くしたかのようだ。明るい月光が彫刻を施した窓から入り込むと、ふとあなたの美しさを思い出す。憂いを消すのに、それを口にすれば憂いを忘れさせてくれると言うわすれぐさに頼るのはやめて、この思いを抱いたまま眠りに落ちて夢に入り込もう。

夢の中もまた暗く、どうすればあなたの姿に会うことができるのだろうか。私は、死者と再会させてくれるという北海の道人の術がないのが恥ずかしいし、あなたも、夢で楚の王を迎えたという帝の娘のような不思議な力がある訳でもない。車に乗って遠い山まで足を運び、さまよい歩いて松の下の墓碑で涙を流す。雨がやめば、雨を降らしつくした雲は消えて戻っていくことはなく、花が落ちれば、そのしべだけを残すことがあるのか——雨と雲、花としべとは、ともに消えるもの、あなたと私もそれと同じであるはずだ。太陽と月と

劉楨与臨淄侯書曰、肅以素秋則落也。
劉良曰、天機、璇璣。運時之急速、忽及素秋矣。

李善曰く、『楚辭』に曰く、「青春謝を受く」と。

潘岳「悼亡詩」に曰く、「曜靈 天機を運び、四節代わることがわる遷逝す」と。

劉楨の「臨淄侯に与うる書」に曰く、「肅として素秋を以て則ち落つるなり」と。

劉良曰く、「天機は、璇璣なり。時を運らすこと急速にして、忽ち素秋に及ぶ」と。

〔校勘〕

楚辭曰 「楚詩曰」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本)

「楚詞曰」(秀州本)

青春受謝 「青春爰謝」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明

州本・秀州本・建州本)

璇璣 璇璣(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)

忽及素秋矣 「忽及素秋」(「矣」を欠く)(陳八郎本・明

州本・秀州本・建州本)

〔訳〕

李善は言う。『楚辭』に言う、「春が、陰の盛り(冬)が去った後を受ける」と。

潘岳の「悼亡詩」に言う、「太陽が自然の運行に従ってめぐり、四つの季節がかわるがわるにうつろっていく」と。

劉楨の「臨淄侯に与うる書」に言う、「しずかに秋になる(葉が)落ちる」と。

劉良は言う。「天機とは、天体を観測する機械、すなわち渾天儀である。時の移り変わりが急速で、すぐに秋になってしまったのである」と。

〔注〕

① 楚辭曰 「青春」の先行用例を示す注。『楚辭』「大招」に、「青春受謝」とあり、王逸は「謝、去也。謝、一作謝(謝は、去るなり。謝、一に謝に作る)」と注している。「受」を「爰」とする本が多いが、「受」が適切である。『楚辭』「大招」は、「青春受謝、白日昭只。春氣奮發、万物遽只(青春謝を受け、白日昭かなり。春氣奮發し、万物遽(まよ)う)」と続き、春の景が続く。「青春爰謝(青春爰に謝る)」と読めば、春が去るということになり、以下の文脈に合わなくなる。

また、二句目に見える「白日」も、この「大招」句中に見える。李善がこの続きの句を引かなかったのは、「大招」中の「白日」は春の太陽であり、この詩に於いては秋の日の太陽である。季節の違いを意識したため、「楚辭」にある「白日」を含む句の引用を控えたのかもしれない。

② 潘岳悼亡詩曰 「天機」の先行用例。この後も潘岳の「悼亡詩」を踏まえたと思われる句が複数見えるので、語句の先行用例が潘岳の句中に見えることを示す目的も有する注となつていよう。また、「天機」の語こそ用いられていないが、ここに引用された「悼亡詩」の句との類似句が潘岳の別作品

にあるので挙げておく。潘岳「寡婦賦」(『文選』卷十六)には、「曜靈曄而邁邁兮、四節運而推移(曜靈曄らかにして邁邁に邁き、四節運りて推移す)」とある。

③ 劉楨与臨淄侯書 「素秋」の先行用例。詩題にある「臨淄侯」は、曹植のこと。『三国志』陳思王植伝(卷十九)に、「(建安)十九年、徙臨淄侯」とある。この詩は逸詩で、この句を除いては現在に伝わらない。

④ 劉良曰 一句目に見える「天機」の説明と、一・二句目の概説。劉良は「天機」を「璇機(璣)」、すなわち天文観測の機械と注するが、それに限定することはないだろう。李善は、潘岳の「悼亡詩」の「曜靈運天機」の句に対し、陳琳の「柳の賦」の「天機之運旋、夫何逝之速也(天機の運旋、夫れ名何ぞ逝くことの速やかなる)」の句を引く。自然の運行のことと考えていいだろう。

03 04 【美人帰重泉 悽愴無終畢】

李善曰、潘岳悼亡詩曰、之子帰窮泉、重壤永幽隔。

音決、重逐龍反。

張銑曰、美人、謂岳妻。重泉、深泉也。悽愴、悲傷也。無終畢、言不極也。

李善曰く、潘岳の「悼亡詩」に曰く、「之の子 窮泉に歸し、重壤 永しえに幽隔す」と。

音決に、重は逐龍の反なり、と

張銑曰く、美人は、岳の妻を謂う。重泉は、深泉なり。悽愴は、悲傷するなり。終畢無しとは、極まらざるを言うなり。

〔校勘〕

(異同なし)

〔訳〕

李善は言う。潘岳の「悼亡詩」に、「妻は土の下へと帰つてゆき、何層にも重なる土は、私と妻とを永遠に隔離している」とある、と。

『音決』にいう、「重」は逐龍の反(チョウと読む、かさなるの意)である、と。

張銑は言う。「美人」とは、潘岳の妻のことである。「重泉」とは、深い泉のことである。「悽愴」とは、悲しみ傷むさまである。「終畢無し」とは、終わることがないことを言う。

〔注〕

① 潘岳悼亡詩曰 潘岳の作品から、類似句を提示している注。「之子」は妻を言う。潘岳「悼亡詩」に対する李善注では、「之子、謂妻也(之の子とは、妻を言うなり)」とある。「之子」は、『詩経』周南・桃夭に、「桃之夭夭、灼灼其華。之子于帰、宜其室家(桃の夭夭たる、灼灼たり其の華。之の子于帰ぐ、其の室家に宜しからん)」とあり、鄭箋は「之子、嫁子也(之の子とは、嫁ぐ子なり)」と言う。江淹の「美人帰重泉」の句は、潘岳の「之子帰窮泉」の句と較べると、

使用する語が違っただけで、内容は同じと言ってよい。続く句も、ともに永遠の断絶を述べており、内容はほぼ同じである。

②張銑曰「美人」「重泉」「悽愴」「無終畢」の語釈。

05 06 【殯宮已肅清 松栢転蕭瑟】

李善曰、陸機挽歌曰、殯宮何嘈々。

寡婦賦曰、虚坐兮肅清。

仲長子昌言曰、古之葬者、松栢梧桐以識其墳。

楚辭曰、蕭瑟兮草木揺落而変衰。

音決、殯必刃反。

李周翰曰、肅清、猶寂寞也。蕭瑟、風吹松栢声也。

李善曰く、陸機の「挽歌」に、「殯宮 何ぞ嘈々たる」と。

「寡婦の賦」に曰く、「虚坐肅清たり」と。

仲長子の『昌言』に曰く、「古の葬は、松栢梧桐は以て其の墳を識るなり」と。

『楚辭』に曰く、「蕭瑟として草木揺落して変衰す」と。

『音決』に、「殯は必刃の反なり」と。

李周翰曰く、肅清は、猶お寂寞のごとくなり。蕭瑟は、風の松栢を吹く声なり、と。

【校勘】

楚辭曰 「楚詞」曰（尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本）

李周翰曰 「良」曰（建州本）

風吹松栢声也 「風吹松栢声」（「也」を欠く）（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

【訳】

李善は言う。陸機の「挽歌」に言う、「かりもがりの堂の、なんと騒がしいことか」と。

（潘岳の）「寡婦の賦」に言う、「人のいない席はひっそりとしている」と。

仲長統の『昌言』に言う、「昔の埋葬では、松栢や梧桐は、それによって墓であることを識別した」と。

『楚辭』（九辯）に言う、「秋風が物寂しく吹き付け、木の葉が落ちて、枝葉は色を変えて枯れ衰える」と。

『音決』に言う、「殯」は、必刃の反（ひん）である、と。

李周翰は言う。「肅清」とは、寂寞（物寂しいさま）のよきな意味である。「蕭瑟」とは、風が松や栢に吹き付け（て枝葉を鳴らし）た音である、と。

【注】

①陸機挽歌曰 「殯宮何嘈々、哀響沸中閨（殯宮 何ぞ嘈々たる、哀響 中閨に沸く）」（『文選』卷二十八）とある。

「殯宮」の先行用例を示す注。殯宮に棺があるうちは、陸機の詩にあるように、死者を弔う人がそこに集まり、悲しみの声で喧しい。李善が引いた「殯宮」の例は、死者が埋葬される前の殯宮の様子を詠んだ句である。江淹の句中の「殯宮」は、それとは異なり、既に死者の入った棺が地中に埋められ

た後の殯宮であり、陸機の詩中の状況とは異なる。しかし、それは注として不適切ということではなく、棺があるうちと、既に埋められた後の騒がしさと静けさの差を明らかにし、「殯宮」の「肅清」さを引き立てることもなるう。

② 寡婦賦曰 「奉虚坐兮肅清、愬空宇兮曠朗（虚坐の肅清たるを奉じ、空宇の曠朗なるに愬う）」とある。「肅清」の潘岳句中の先行用例を示す。

③ 仲長子昌言曰 「仲長子」は、三国魏の仲長統。「松栢」の先行用例というよりは、「松栢」が何を象徴するものであるかを明示するために施された注。「松栢」は、四季を通して葉の色を変えないことから、節操を守り通すことや、長く繁栄することを想起させることが多い。この句中の「松栢」は、その意味ではなく、墓地に植えられる樹木であるということを示すために、この先例を引いているのである。

④ 楚辞曰 宋玉の「九辯」。「蕭瑟」の先行用例。

⑤ 李周翰曰 「肅清」「蕭瑟」の語釈。

07 08 【俯仰未能弭 尋念非但一】

李善曰、楚辞曰、聊抑志而自弭。

賈逵国語注曰、弭、忘也。

魏文帝詩曰、所憂非但一。

音決、弭亡尔反。

陸善経曰、弭、止也。俯仰之間、哀情未止、尋念平生非但一事。

李善曰く、『楚辞』に曰く、「聊か志を抑えて自ら弭む」と。賈逵の『国語』注に曰く、「弭は、忘なり」と。

魏の文帝の詩に曰く、「憂うる所は但だ一たびなるのみに非ず」と。

『音決』に、弭は亡尔の反なり、と。

陸善経曰く、「弭は、止むなり。俯仰の間、哀情未だ止まず、平生を尋念すること但だ一事に非ず」と。

〔校勘〕

楚辞曰 「楚詞曰」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本)

陸善経曰 「濟曰」(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)

俯仰之間、哀情未止 欠(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)

尋念平生非但一事 「言尋思哀念非但一塗」(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)

〔訳〕

李善は言う。『楚辞』に、「少し気持ちを抑えて自らとどまる」と。

賈逵の『国語』注にいう、「弭とは、忘れるということである」と。

魏の文帝の詩に言う、「憂えることはひとたびばかりのことではない」と。

『音決』に言う、弭は亡尔の反(び)である、と。

陸善経は言う。「弭とは、とどめるといふことである。わずかな間でも、悲しみの思いは消えることはなく、妻がいた頃を思い求めることは一度だけということはない」と。

〔注〕

① 楚辞曰 『楚辞』遠游。「弭」の先行用例。

② 賈逵国語注 「弭」の先行用例。『国語』周語下に施されたと考えられる注。周語下には、「自我先王厲・宣・幽・平而貪天禍、至于今未弭（我が厲・宣・幽・平の天禍を貪りしより、今に至るまで未だ弭まず）」とある。韋昭は「弭、止也」と注し、賈逵と異なる解釈をしている。

③ 魏文帝詩 曹丕「善哉行」に、「君子多苦心、所愁非但一（君子に苦心多く、愁うる所は但一たびなるのみに非ず）」とある。「非但一」の先行用例。

④ 陸善経曰 他のテキストでは「濟曰」とあり、呂延済の注とする。「弭」については、李善が引いた賈逵の国語注が「忘る」と解するには従わず、韋昭と同様に「止む」と解する。また、この陸善経注は、七・八句目の解釈も付す。

09 10 【撫衿悼寂漠 恍然若有失】

李善曰、潘岳悼亡詩曰、撫衿長嘆息。

② 王逸楚辞注曰、恍、失意也。

③ 范曄後漢書曰、戴良見黃憲、及帰罔然若有失。

音決、悼徒到反。恍許往反。

④ 劉良曰、悼、傷也。恍、驚視兒。言傷此寂寞、驚視左右、如有所失也。

李善曰く、潘岳の「悼亡詩」に曰く、「衿を撫して長嘆息す」と。

王逸の『楚辞』注に曰く、恍は、意を失うなり、と。

范曄の『後漢書』に曰く、「戴良 黄憲に見え、帰るに及びて罔然として失う有るがごとし」と。

『音決』に、悼は徒到の反なり、恍は許往の反なり、と。劉良曰く、悼は、傷むなり。恍は、驚き見るの兒（貌）なり。此の寂寞を傷み、驚き左右を視るに、失う所有るがごときを言うなり、と。

〔校勘〕

撫衿長嘆息 「撫襟長歎息」(尤刻本・胡刻本・国子監本

・明州本・秀州本・建州本)

王逸楚辞注曰 「王逸楚詞注曰」(尤刻本・胡刻本・国子

監本・明州本)

范曄後漢書曰 「後漢書曰」(「范曄」を欠く)(尤刻本・

胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)

罔然若有失 「罔然若有失也」(尤刻本・胡刻本・国子監

本・明州本・秀州本)

驚視兒 「驚視貌」(明州本・秀州本・建州本)

如有所失也 「有所失也」(「如」を欠く)(陳八郎本・明

州本・秀州本・建州本)

〔訳〕

李善は言う。潘岳の「悼亡詩」に、「衿を撫でて長々と溜息をつく」とある。

王逸の『楚辞』注に言う、「怛とは、失意のさまである」と。

范曄の『後漢書』に言う、「戴良は黄憲に会ったが、帰るときにはぼんやりとして何かを失くしたかのようだった」とある。

『音決』に言う、「悼」は徒到の反（とう）であり、「怛」は許往の反（きよう）である、と。

劉良は言う、「悼とは、悲しむことである。怛とは、驚き視る様子である。この物寂しさを悲しみ、はつとして左右を見てみると、喪失感に襲われたようになる、と言っているのである」と。

〔注〕

① 潘岳悼亡詩曰 潘岳に「撫衿」の語が用いられた詩があることを示す。「悼亡詩」には、「撫衿長嘆息、不覺涕霑胸（衿を撫して長嘆息し、覺えず涕 胸を霑す）」とある。

② 王逸楚辞注曰 『楚辞』少司命の王逸注。「臨風怛兮浩歌（風に臨みて怛として浩歌す）」の句に、王逸は「怛、失意貌」と注している。

③ 范曄後漢書曰 他のテキストは「范曄」を欠く。『後漢書』という名の史書は范曄のもの以外にもあり、『隋書』経

籍志（卷二十八）には、呉の謝承や晋の謝沈による『後漢書』があったと記されている。それらの『後漢書』とは異なるということを明らかにするため、底本は「范曄」を加えたものと思われる。当該の逸話は『後漢書』黄憲伝（卷五十三）に見える。「同郡戴良才高倨傲、而見憲未嘗不正容、及帰、罔然若有失也（同郡の戴良 才高く倨傲にして、憲に見えて未だ嘗て容を正さずんばあらず、帰るに及びて罔然として失う有るがごとし）」。『若有失』の先行用例として挙げられている。なお、さらに先行する用例として、魏の呉質の「答東阿王書」に「罔若有失」とある。

④ 劉良曰 「悼」「怛」の語釈と、九・十句目の解釈。「怛」の意味の解釈が、李善が引用している楚辞注とは異なっている。李善の解釈と劉良の解釈のいずれが適切であるかは判断が難しいが、劉良の解釈は、解釈の根拠となる先例が示されていないため、李善注の方が信憑性があるように感じられる。

11 12 【明月入綺窓 髣髴想蕙質】

李善曰、潘岳悼亡詩曰、歲寒無与同、朗月何朧朧。独無李氏靈、彷彿覩爾容。

古詩曰、交疏結綺窓。

左九嬪武帝納皇后頌曰、如蘭之茂。蕙蘭同類。故變文耳。

音決、髣髴往反、髣髴味反。

呂向曰、髣髴、相見兒。蕙質、言體質芳芬如蘭蕙也。陸善經曰、蕙質、柔惠之質。今案、陸善經本蕙為惠。

李善曰く、潘岳の「悼亡詩」に曰く、「歳寒くして与に同にする無く、朗月何ぞ臙臙たる。独り李氏の靈の、彷彿として尔の容を覩る無し」と。

古詩に曰く、「交流結綺の窓」と。

左九嬪の「武帝の皇后を納るる頌」に曰く、「蘭の莪るがごとし」と。蕙・蘭は同類なり。故に文を變ずるのみ。

『音決』に、髣髴は芳往の反なり、髣は芳味の反なり、と。

呂向曰わく、「髣髴は、相見るの兒なり。蕙質は、體質の芳芬として蘭蕙のごときを言うなり」と。陸善経曰く、「蕙質は、柔恵の質なり」と。今案ずるに、陸善経本 蕙を恵と為す。

〔校勘〕

歳寒無異同 「歳寒無異同」(国子監本・明州本・秀州本)

彷彿 「髣髴」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)

交流結綺窓 「交流結綺窓」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・建州本)

如蘭之莪 「如蘭之莪」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本)

蕙蘭同類 「蕙蘭類」(「同」を欠く)(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)

故変文耳 「故変之耳」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・建州本)

相見兒 「想見兒」(陳八郎本)

「想見貌」(明州本・秀州本・建州本)

體質芳芬 「體質芬芳」(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)

如蘭蕙也 「如蘭蕙」(「也」を欠く)(建州本)

陸善経曰：陸善経本蕙為恵 欠(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)

〔訳〕

李善は言う。潘岳の「悼亡詩」に、「寒い季節になっても一緒にいてくれる人はいない、明るい月は何故におぼろげなのだろう。漢の武帝の前に現れたという李夫人の靈のように、お前の姿をそっくり見ることができないものは何もない」とある。

古詩十九首に言う、「格子型の彫刻を施した窓」と。

左九嬪の「武帝が皇后を迎えた頌」に、「蘭が茂ったかのようにである」とある。蕙と蘭とは同じ種類の植物である。だから文を(蘭から蕙に)変えただけなのである。

『音決』にいう。「髣」は芳往の反(ほう)であり、「髴」は芳味の反(はつ)である。

呂向は言う、「ふと妻を見るさまである。蕙質とは、からだのかぐわしさが香草のようであることを言う」と。陸善経は言う、「蕙質とは、おだやかな性質を言う」と。今考えてみるに、陸善経本では、「蕙」を「恵」としている。

〔注〕

① 潘岳悼亡詩曰 潘岳「悼亡詩」中の類似句を提示した注。
 ② 古詩曰 古詩十九首の一。「交疏結綺窓、阿閣三重階（交疏 結綺の窓、阿閣 三重の階）」とある。「綺窓」の先行用例を提示する。

③ 左九嬪武帝納皇后頌曰 「蕙」に対する注。李善は、「蕙」を「蘭」に代えて用いていると説明する。確かに「蕙」は蘭と同じ香草の類で、班固の「西都の賦」には「蘭林蕙草」と見える。しかし、李善が引いている左九嬪の句からは、「蘭」から「蕙」を導き出し、かつ「蘭」が「蕙」と類似のものである、ということを観察するには不十分である。この左九嬪の句には「蘭」の字があるのみで、「蕙」は見えない。それがどうして、「蕙・蘭は同類なり」という根拠になるのであるうか。確かに左九嬪の句は女性を蘭に例えたもので、妻の姿を「蕙質」と言うこの句とは、その点では共通する。しかし、それだけで「蕙・蘭は同類なり」と言うのは少々難しいであろう。

④ 呂向曰 十二句目に対する注。「髣髴」「蕙質」の解釈を述べる。「蕙」について呂向は「如蘭蕙」と言い、李善同様、「蕙」を説明するのに「蘭」を用いている。「蕙」が見慣れた文字ではないため、「蘭」の字とともに用いることにより、理解しやすくなるのだろう。

13 14 【消憂非萱草 永懷寄夢寐】

李善曰、毛詩曰、焉得諼草、言樹之背。毛萇曰、諼草令人忘憂也。

毛詩曰、終其永懷。

寡婦賦曰、願仮夢以通靈。

音決、萱火袁反。寐、協韻、亡日反。下如字。

張銑曰、萱草之名、可忘憂也。言岳之憂非萱草所能消、但懷想夢寐而已也。

李善曰く、『毛詩』に曰く、「焉くにか諼草を得て、言に之を背に樹えん」と。毛萇曰く、「諼草は人をして憂いを忘れしむるなり」と。

『毛詩』に曰く、「終に其れ永しえに懷う」と。寡婦の賦に曰く、「夢に仮りて以て靈に通ぜんことを願う」と。

『音決』に、萱は火袁の反。寐は、協韻なり、亡日の反なり。下 字のごとし、と。

張銑曰わく、「萱草の名は、憂いを忘るべきなり。言うところは、岳の憂いは萱草の能く消す所に非ず、但だ夢寐に懷想するのみなり」と。

〔校勘〕

令人忘憂也 「令人忘憂」（「也」を欠く）（尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本）

萱草之名 「萱草草名」（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）。二字目の「草」が踊り字になり、底本（乃至は底本

が参照したテキスト）はこれを「之」と誤ったのであろう。
岳之憂 「岳之此憂」（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

所能消 「所能銷」（陳八郎本）

但懷想夢寐 「但懷夢寐」（「想」を欠く）（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

而已也 「而已」（「也」を欠く）（陳八郎本・明州本・秀州本）

〔訳〕

李善は言う。『毛詩』に言う、「どこかで忘れ草を手に入れて、これを北堂に植えよう」と。毛萇は言う、「諼草とは、人に憂いを忘れさせるものである」。

『毛詩』に言う、「終始ずつと思ひ続ける」と。

潘岳「寡婦の賦」に言う、「夢の中であなたの靈魂と出たいと願う」と。

『音決』にいう、「萱は火衰の反（けん）。寐は韻が通じて、亡日の反（びつ）である。下の（十五句目）は字の通りの音である」と。

張銑は言う、「忘れ草という名前（の草）は、憂いを忘れることができるのである。潘岳の憂いは忘れ草でも消すことができないうので、ひたすら夢の中で思い出すことしかできない、ということを行っているのである」。

〔注〕

①毛詩曰 『詩経』衛風・伯兮。毛萇はこの句に「諼草令人忘憂。背北堂也（諼草は人をして憂いを忘れしむ。背は北堂なり）」と注す。「萱草」の先行用例を示した注であり、李善は同じ忘れ草の「諼草」を引いて説明している。なお、嵇康の「養生論」に「萱草忘憂（萱草は憂いを忘る）」とある。

②毛詩曰 『詩経』小雅・正月に、「終其永懷、又窈陰雨（終に其れ永しえに懐い、又た陰雨に窈しむ）」とある。「永懷」の先行用例。

③寡婦賦曰 潘岳「寡婦の賦」。「願仮夢以通靈兮、目炯炯而不寢（夢に仮りて以て靈に通ぜんことを願うも、目は炯炯として寝ねず）」とある。潘岳の作品中から、「永懷寄夢寐」の類似句を提示している注。

④張銑曰 「萱草」の説明と、十三・十四句目の内容を解釈した注。

15 16 【夢寐復冥冥 何由覲爾形】

李善曰、潘岳哀永逝曰、既目遇兮無兆、曾寤寐兮不夢。冥冥、幽昧也。

文子曰、慮患於冥冥之外也。

音決曰、冥亡丁反。覲徒的反。

李周翰曰、冥々、昏闇也。言夢寐之中又昏闇、何從得見爾之形容。

李善曰く、潘岳の「哀永逝」に曰く、「既に目遇うも兆無

く、曾て寤寐に夢みず」と。冥冥とは、幽昧なり。

『文子』に曰く、「患いを冥冥の外に慮るなり」と。

『音決』に曰く、「冥は亡丁の反なり。覲は徒的の反なり」と。

李周翰曰く、「冥々は、昏闇なり。言うところは、夢寐の中も又た昏闇なり、何に従りてか尭の形容を見るを得ん」と。

〔校勘〕

潘岳哀永逝曰 「潘岳哀永逝賦曰」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)

既目遇兮無兆 「既目遇兮無眺」(秀州本)

冥冥之外也 「冥冥之外」(「也」を欠く)(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)

昏闇也 「昏暗也」(秀州本)

爾之形容 「爾之形容也」(陳八郎本)

〔訳〕

李善は言う。潘岳の「哀永逝文」に、「以前まぶたに浮かんだ時でも、(あなたに出会えるような)きざしはなく、かつては寝ても覚めても夢に見ることもなかった」とある。「冥冥」とは、暗く深いさまである。

『文子』にいう。「禍を暗闇の外に慮る」と。

『音決』に言う。「冥は亡丁の反(めい)である。覲は徒的の反(てき)である」。

李周翰は言う、「冥々とは、暗いことである。夢の中も真

つ暗で、どうすればお前(妻)の姿を見ることができのだろうか、と言っているのである」と。

〔注〕

① 潘岳哀永逝曰 潘岳の「哀永逝文」から、この二句と類似した句を引いている。妻の姿にすら出会えない様を嘆く内容である。また、「哀永逝文」には「棺冥冥兮窆窆窆(棺は冥冥として、塚は窆窆たり)」という句もあり、十五句目の「冥冥」の語も見える。江淹が「哀永逝文」を参考にしてこの句を作ったことが窺える。

② 文子曰 「聖人先福於重関之内、慮患於冥冥之外也(聖人は福を重関の内に先んじ、患いを冥冥の外に慮る)」とある。「冥冥」の先行用例。

③ 李周翰曰 「冥冥」の説明と、十五・十六句目の解釈。

17 18 【我慙北海術 爾無帝女靈】

李善曰、列異伝曰、北海營陵有道人能使人与死人相見。同郡人、婦死已数年。聞而往見之曰、願令我一見、死不恨。道人教其見之。於是与婦相見、言語悲喜、恩情如生。良久、乃聞鼓声怳々。不能出戸、奄門乃走、其裾戸閉製絶而去。後歳余、此人死。家葬之、開見婦棺、蓋下衣裾。

宋玉集曰、楚襄王与宋玉遊於雲夢之野、望朝雲之館、有氣焉、須臾之間、變化無窮。王問此是何氣。玉对曰、昔先王遊於高堂。怠而昼寝、夢見一婦人自云、我帝之季女、名曰瑤姬。

未行而亡、封於巫山□之台。聞王來遊、願薦枕席。王因幸之。去乃言、妾在巫山之陽高丘之阻、且為朝雲、暮為行雨、朝々暮々陽台之下。且而視之、果如其言。為之立館、名曰朝雲。

呂延濟曰、自歎無見死之術、歎婦無見夢之靈。

李善曰く、『列異伝』に曰く、「北海宮陵に道人の能く人をして死人と相見えしむる有り。同郡の人、婦 死して已に数年なり。聞きて往きて之に見えて曰く、願わくは我をして一たび見えしめんことを、死すとも恨まず、と。道人 其れをして之に見えしむ。是に於いて婦と相見るに、悲喜を言語し、恩情生くるがごとし。良久しくして、乃ち鼓声の恨々たるを聞く。戸を出づること能わず、門を掩おさいて乃ち走り、其の裾戸閉じ製絶えて去る。後 歳余にして、此の人死す。家之を葬るに、婦の棺を開き見るに、蓋下に衣裾あり」と。

『宋玉集』に曰く、「楚の襄王 宋玉と雲夢の野に遊び、朝雲の館を望むに、氣有り、須臾の間に、変化して窮まり無し。王 此れは是れ何の氣なるかを問う。玉 対えて曰く、『昔 先王 高堂に遊ぶ。怠して昼に寝ぬるに、夢に一婦人の自ら、我は帝の季女、名を瑤姫と曰う。未だ行かずして亡じ、巫山□の台に封ぜらる。王の來遊するを聞き、願わくは枕席を薦めん、と云うを見る。王 因りて之を幸す。去らんとして乃ち言う、妾は巫山の陽・高丘の阻に在り、且には朝雲と為り、暮れには行雨と為り、朝々暮々陽台の下に、と。且にして之を視れば、果たして其の言のごとし。之が為に館を立て、名づけて朝雲と曰う』と。

呂延濟曰く、「自ら死に見ゆるの術無きを歎き、婦に夢に見わるるの靈無きを歎く」と。

〔校勘〕

死不恨 「死人不恨」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)

道人教其見之 「遂教其見之」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・建州本)

於是与婦相見 「於是与婦人相見」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)

恨々 「恨々」(尤刻本) ※底本は「恨」とも「恨」とも判読し難い

掩門乃走 「掩門乃走」(尤刻本・胡刻本・明州本・秀州本・建州本)

其裾戸閉製絶而去 「其裾為戸所閉製絶而去」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)

家葬之 「家人葬之」(秀州本)

蓋下衣裾 「蓋下有衣裾」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)

宋玉集曰 「宋玉集云」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)

王問此是何氣 「王問此是何氣也」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)

遊於高堂 「遊於高唐」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明

州本・秀州本・建州本)

夢見一婦人 「夢見婦人」(「一」を欠く)(建州本)

封於巫山□之台 「封於巫山之台」(尤刻本・胡刻本・国

子監本・明州本・秀州本・建州本)

且而視之 「且起視之」(建州本)

呂延濟曰 陳八郎本では「濟曰」の下に、『列異記』・「宋玉集」の部分引用がある。もともと李善の注であるが、陳八郎本では全て呂延濟が施した注のように書かれている。陳八郎本の、この句に対する注は以下のようになっている。「濟曰、北海營陵県有道人能令与死者相見。同郡有人喪婦已經数年。乃教見之、言語悲喜、恩情如生平。楚懷王遊高唐。夢見婦人自云、我帝之季女、名瑤姬。未嫁而亡。聞王遊高唐、願薦枕席。自歎無見死之術、婦無見夢之靈。」秀州本は、これと同様に注する(ただし、明州本が「楚懷王」とする箇所を「楚襄王」とし、「自歎」の前に「岳」字を加える)が、この後にさらに「善曰」として、『列異伝』『宋玉集』の引用をも加える。

歎婦無見夢之靈 「婦無見夢之靈」(「歎」を欠く)(明州本・建州本)また、建州本はこの後に続けて「余同善注(余は善の注に同じ)」と注す。陳八郎本や明州本のように、呂延濟の注の中に組み込まれている『列異伝』『宋玉集』の話を指して、これが李善注と重複することを指摘する。

〔訳〕

李善は言う。『列異伝』に言う、「北海の營陵に、人と死人

とを対面させることができる道人がいた。同じ郡の人に、妻が亡くなって、もう数年が経過していた者がいた。それを聞きつけて、行って会って言うには、『どうか私を(死んだ妻に)会わせてください、そうすれば死んでも恨むことはございません』。道人は、彼を妻に会わせた。そこで妻と顔を合わせ、悲喜こもごもの情を語りあい、相手をいつくしむ思いは生前さながらであった。しばらくすると、(終わりの合図の)太鼓の音がドンドンと聞こえてきた。後ろ髪を引かれて門を出ることができなかったが、門を閉じて走ると、その裾は扉に挟み込まれて、衣が裂けて去っていった。その後一年ほどして、その人は亡くなった。家の人が彼を葬ろうとして、妻の棺を開けて見てみると、蓋の下に衣の裾があった。」

『宋玉集』に言う。「楚の襄王は宋玉と雲夢沢の野に出遊し、朝雲の館を見上げると、そこに気があり、僅かの間に際限なく変わっていった。王は、これはどのような気であるのかと尋ねた。宋玉がお答えした。『昔、先代の王(懷王)は高い御殿にお出ましになりました。けだるくなって昼にうたた寝をすると、夢の中で一人の婦人がこう言っているのを見ました。「私は帝(赤帝)の末の娘で、名を瑤姬と申します。まだ嫁がぬうちに死に、巫山の台に封ぜられました。王が東の方にお出ましになったと聞き、枕としとねをお勧めしたいと存じます。」王はそこで彼女を寵愛しました。女が去り際に言うには、「私は巫山の南、小高い丘の險所におり、明け方には朝雲となり、夕暮れには雨となり、朝な夕なに陽台の下におります。」朝になって見てみると、果たしてその言葉

の通りでした。女のために館を建て、朝雲と名付けたのです。』

呂延済は言う、「自ら死者に会う術がないことを歎き、また、妻には夢に現れるほどの霊力もないことを歎いているのである」と。

〔注〕

① 列異伝曰 十七句目「北海術」の典故の提示。死者と出会う術を持っていた道人の話で、その道人のように死者と出会う事ができないのを痛恨に思っているのである。この『列異伝』の話の中の男のように、死んだ妻と出会う事ができるのであれば、自らの死をも厭わない、という強い思いを含んでいよう。

② 宋玉集曰 十八句目「帝女靈」の典故の引用。宋玉の「高唐賦」序に出てくる、楚の懐王の夢に赤帝の娘が現れ、枕席を勧めて一夜をともしした話である。十七句目では、妻に会いに行くことができないう自分を言い、十八句目では自分に会いに来ることができない妻を言う。双方とも会いに行く術がないことを「北海術」と「帝女靈」を引いて表現している。

③ 富永一登・衣川賢次「新出『文選』集注本残巻校記」によれば、「山」字の見せ消ちである。

④ 呂延済曰 十七・十八句目の解釈。江淹が典故を用いて表現した部分を、平易に言い換えている。

19 20 【駕言出遠山 徘徊泣松銘】

李善曰、毛詩曰、駕言出遊。

音決、銘莫經反。

劉良曰、山、墳也。銘、碑也。

陸善経曰、松銘、銘誌在松栢間。諭逝者不返。

李善曰く、『毛詩』に曰く、「駕して言に出遊す」と。

『音決』に、「銘は莫經の反なり」と。

劉良曰く、「山は、墳なり。銘は、碑なり」と。

陸善経曰く、「松銘は、銘誌の松栢の間に在るなり。逝く者の返らざるを喩う」と。

〔校勘〕

李善曰：駕言出遊 明州本・秀州本・建州本では、この注は21・22句目の下にある。

劉良曰：碑也 陳八郎本・明州本・秀州本・建州本では、この注は21・22句目の下にある。

陸善経曰：諭逝者不返 欠（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

〔訳〕

李善は言う。『毛詩』（邶風・泉水。また、衛風・竹竿にも見える）に「車に乗って外に出掛ける」とある、と。

『音決』に言う。「銘は、莫經の反（べい）である」と。劉良は言う。「山とは、墓のことである。銘とは、墓碑の

ことである」。

陸善経は言う。「松銘とは、墓誌銘が松や柏の植わっている周囲にあることを言う。死んだ者はもう戻って来ないことを例えている」と。

〔注〕

①毛詩曰 『詩経』邶風・泉水に「駕言出遊、以写我憂（駕して言に出遊し、以て我が憂いを写かん）」とあり、また『詩経』衛風・竹竿にも、邶風・泉水と同様の二句が見える。李善が二者のいずれを示しているのか判然としない。「駕言出」の先行用例を示す注であり、また泉水・竹竿はその後に「以て我が憂いを写かん」と続けていることから、その行動の目的が、憂いを除くことである、ということをも示していよう。

②劉良曰 「山」「銘」の意味の解説。

③陸善経曰 「松銘」の意味の解説。

21 22 【雨絶無還雲 華落豈留英】

李善曰、鸚鵡賦曰、何今日之雨絶。

劉良曰、雨絶華落、喻死而不還也。

李善曰く、「鸚鵡の賦」に曰く、「何か今日の雨の絶ゆる」と。

劉良曰く、「雨絶華落は、死して還らざるに喩うるなり」と。

〔校勘〕

李善曰 欠（明州本・秀州本・建州本）※19・20句目の李善注と一括されているため

劉良曰 欠（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）※19・20句目の劉良注と一括されているため

雨絶華落 「雨絶花落」（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

喻死而不還也 「喻死而不還」（「也」を欠く）（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

〔訳〕

李善は言う。「鸚鵡の賦」に、「いつになれば今日の雨がやむのか」と。

劉良は言う。「『雨絶』『華落』とは、死んで再び戻って来ないことに例えているのである」と。

〔注〕

①鸚鵡賦曰 禰衡「鸚鵡の賦」に、「何今日之雨絶、若胡越之異区（何ぞ今日の雨絶したる、胡越の区を異にするがごとし）」とある。李善は「雨絶」の先行用例としてこの句を引くが、正しくは「雨絶」である。「鸚鵡の賦」で、「若胡越之異区（北の異民族の胡、南の異民族である越とが、居る場所が全く異なっているかのようだ）」と続き、二者が遠く隔たったことを言うことから、「雨絶」が正しいであろう。

胡克家の文選校異では、「鸚鵡の賦」の「雨絶」は「雨絶」とすべきだと言う。

②劉良曰「雨絶」「華落」の解釈。十九・二十句目に付されていた陸善経の注とほぼ同内容である。「喻逝者不返」という陸善経の注は、この劉良注のようにここに付される方が、内容からしてふさわしいであろう。

23 24 【日月方代序 寝興何時平】

李善曰、潘岳悼亡詩曰、四節代遷逝。又曰、寝興自在形。

呂向曰、言日月雖遠、起臥思憶猶未平也。

李善曰く、潘岳の「悼亡詩」に曰く、「四節代わるがわる遷逝す」と。又た曰く、「寝興 目に形在り」と。

呂向曰く、「言うところは、日月遠しと雖も、起臥に思憶して猶お未だ平らかならざるなり」と。

〔校勘〕

寝興自在形 「寝興自在形」(尤刻本・胡刻本)

「寝興自在形也」(国子監本・明州本・秀州)

本・建州本)
猶未平也 「情猶未平」(「也」を欠く)(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)

〔訳〕

李善は言う。潘岳の「悼亡詩」に、「四つの季節が代わる代わる移ろっていく」とある。また、「寝ても覚めても目からその姿が離れない」とある。

呂向は言う、「(妻が死んで以来)時間が経過したとはいえ、起きても寝ていても思い出して、今になっても心が静まらないことを言っているのである」と。

〔注〕

①潘岳悼亡詩曰「悼亡詩」中から、類似の表現の句を引いた注。二十三句と「四節代遷逝」を似ていると見做して引用していると思われる。また、二十四句目に見える「寝興」の語が「悼亡詩」中にも用いられていることを示している。

②呂向曰 二十三・二十四句目の解釈。

(筑波大学大学院人文社会科学科博士課程)